

人格障害という言葉は知っていても、実際にこの領域の人が患者さんとして、あるいは日常生活のなかで遭遇していることがあっても、実際ははっきりと精神医学的な人格障害として受け止めることは少ないと思われる。近年、この言葉が医療のなかで問題を起こすことで、意識せざるを得ない状況にあるのではないだろうか。

私自身、長年にわたり身体医学を実践してきたが、故小此木啓吾先生の精神分析ゼミナールへの参加を契機に、初めて人格障害なるものを意識するようになった。身体医学に携わる医師にとっては、精神的な問題を背景にもっている患者さんは苦手である。患者さんのなかにこの領域の人がいると、その対処法に苦慮するのみならず、これが医療問題に発展することもある。

この度、日常の診療でみられる人格障害像はどのようなものか、医療のなかで遭遇するときに明確に患者さんに対処できるように、わかりやすく解説されている本書が出版された。一般診療医にとり、本書はこの難問に回答を与えてくれ、まさに機を得た出版といえよう。人格障害という概念に目を覚まされ、目を向けることができるようになる。DSM の分類の解説と有用性について、わかりやすく述べられ、診断・治療、対処法などについての指針が示されている。さらに精神分析から発展してきた人格障害へのアプローチの歴史がまとめられており、現在的人格障害に対するスタンスがわかる。重要なことであるが、人格障害の治療で患者さんを力動精神医学的な立場から理解して行う有用性につき、一貫した治療姿勢をとっておられる。したがって、類型化や薬

物療法が主体ではないことが強調されている。

身体医学では合併症という概念はよく使われるが、精神医学では併存(comorbidity)という言葉がよく使われる。因果関係のはっきりしない疾患をもっているときの表現である。このような精神科領域で使用される言葉について理解できるように、各所にメモとして解説が付されている。

現実に行われている人格障害の診断・治療のうち、特に治療については一般診療科における治療とは異なるわけだが、教科書的に書かれたものは実際にどんな治療を行っているか、その治療がみえてこない。それが、本書の対談のなかでは、精神科と心療内科で力動精神医学を実践している医師たちが、実際の治療での指針や、苦労、問題点を出し合い、現時点での対処されている方法が提示されている。これを読まれたとき、自分の経験した類似症例や、同じケースの対処法があり、参考にできるところが多い。日常診療にそのまま移行されて、実践することが可能である。

以上、本書の形式は前半では人格障害についての診断的な意義や、治療姿勢を精神分析的な立場からわかりやすく理解させ、さらに後半には座談会形式で一般臨床における人格障害への対処法に実践的な話が出され、理解を深めることができるようになっている。各人格障害の診断基準も載っており、一読した後に外来診療や病棟で本書を側に置いておくと便利な1冊である。

(A5判 122頁 定価2,415円(本体2,300円+税5%))
2004年 三輪書店 刊